

巨大災害リスクを 乗り越えるため、 共有すべきメッセージ

評者◎喜多悦子

公益財団法人笹川記念保健協力財団理事長
日本赤十字九州国際看護大学名誉学長

放射線災害と向き合って

—福島に生きる医療者からのメッセージ

福島県立医科大学附属病院被ばく医療班(現・放射線災害医療センター)編

定価 2310 円(本体 2200 円+税 5%) / ライフサイエンス出版 (Tel : 03-3664-7900)



2013 年 5 月に出版されたこの本は、東日本大震災により発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故の直後から、過酷な状況に置かれた保健医療者の貴重な経験と苦悩を、福島県立医科大学の医師らがつづつたものです。

「福島県立医科大学附属病院被ばく医療班」(現・放射線災害医療センター)の人々は、自らの良心に従って原発事故後の過酷な事態に対峙されました。本書には、あの未曾有の原発事故に正面から向き合った唯一の保健分野の教育研究拠点、医科大学の現場の声の集積として、その経過・想いが、心の奥底から絞り出された、生きたメッセージとしてまとめられています。

なぜ、過酷な負担を福島県立医科大学が背負わざるをえなかったか、日本の、そして世界の後世に、何を伝えるべきかを示す、いつまでも色あせることのない必読書です。

また、本書はその章だてとして、保健医療関係者が最低限知っておくべき放射能・放射線の基礎知識や、放射線災害の過去の事例、さらに放射線健康リ

スクの考え方や、さらに現在福島県で行われている県民健康管理調査事業が、平易かつ論理的に紹介されています。とくに、近未来の巨大災害リスクが危惧されるわが国では、これらの知識や経験の詰まった本書は、あらゆる保健専門家だけでなく、その分野の学生も目を通すよう広く推薦されるべき良書です。

福島県立医科大学は、あたかも歴史的使命を与えられたかのように、東日本大震災とそれに伴う原発事故という「悲劇」を乗り越え、着実な復興と再生への道を歩み続けられています。全国の保健医療関係者は一層の協力と支援を継続すべきでしょう。

東日本大震災、および東京電力福島第一原子力発電所の事故から 2 年 4 か月を経た今、あらためて、なお避難生活と種々の困難を強いられている多くの方々に心からお見舞い申し上げるとともに、人々の苦難を共有するためにも、ぜひ、本書を手に取り、事実を知り、今後の危機対応、リスク管理も理解しておいていただきたいと思います。